要旨

牛島春子の「處女地」論―在満朝鮮人の再構築と植民地主義の捉え方―

賈　戈輝

周知のように、「満洲国」は、1932 年に「建国」され、1945 年に滅びた、中国東北部に十三年間存在した日本の傀儡国家であった。植民地主義的な力学によって創立されたこの空間は、1931 年満洲事変から、1937 年日中戦争を経て、1945 年太平洋戦争の終戦までの十四年間にわたって、植民地として日本と深くかかわっていた。ここで「満洲国」のスローガン「王道楽土」「五族協和」という「満洲建国精神」と「民族協和精神」を唱え、日本の植民地政策を積極的に文学作品によって推し進めた「満洲作家」が出現した。その中で、1932 年から 1946 年まで足掛け十年間「満洲国」に住んでいた牛島春子という日本人作家がいる。牛島春子は 1929 年、県立久留米高等女学校を卒業した後、左翼運動に参加、二度にわたり検挙され、1935 年、懲役二年執行猶予五年の判決を受けた。1936 年、日本主義者牛嶋晴男と結婚し、執行猶予中の身で住みどころのない日本から「満洲」に逃げた。そして、1946 年 7 月には日本に引き揚げた。彼女の作品はいつも満人 (中国人) を主人公にし、「満洲国」の描写に励んでいた。「満洲」での日本作家として日本文壇に名を挙げ、晩年になり改めて「満洲時代」の生き残り作家として注目された。

「満洲国」崩壊後、「満洲国」が実質的に日本の植民地主義の実験場だったことが明らかになった時点において、牛島春子の開拓作品を振り返ってみると、彼女がどのように開拓民を捉えていたのかを明らかにしたい。本論文では彼女の唯一の開拓団（朝鮮開拓団）を題材にした小説「處女地」に焦点を当て、歴史的事実と対照しつつ物語を具体的に検証する。「處女地」と歴史的事実とのズレを、主人公の真実性、土地租借と中鮮農民対立に重点を置きながら、具体的に検討する。それを通して、作者が歴史を取捨選択した傾向を究明しようと考える。それに、作者の開拓文学の限界性を見出し、作者の植民地主義についての認識を具体的に把握することを期待する。

Abstract

Analysis of Ushijima Haruko's *Syojyochi* : The Reconstruction of Korean People in Manchu and the Perception towards Colonialism

Gehui JIA

As is well known, "Manchukuo" was a puppet state of Japan that was founded in 1932 and perished in 1945, which existed in northeast China for thirteen years. As a colony, this state was founded by colonial dynamics that has been deeply involved with the Empire of Japan for the fourteen years from the 1931 Mukden Incident, through the second Sino-Japanese War in 1937, to the end of the Pacific War in 1945. In this period, "Manchurian Writer" has appeared and actively promoted Japan's colonial policy through literary works by chatting the Founding spirit of Manchukuo ----"Peaceful country which is govern by the virtue of Confucianism with fair and peace " and "Five Races Under One Union". Among them, there is a Japanese writer named Haruko Ushijima who lived in "Manchukuo" for ten years from 1932 to 1946.

After graduating from Fukuoka Prefectural Meizen High School in 1929, Haruko Ushijima participated in the leftist movement and was arrested twice. In 1935 she was sentenced to two years in prison suspended for 5 years. In 1936, she married the Japaneseist Haruo Ushijima and fled to Manchuria when she was on suspended and had nowhere to live in japan. And she returned to Japan in July 1946.She worked hard to describe "Manchuria"(Chinese) as the main character in her works. She made a name for herself as a Japanese writer in "Manchuria" and was noted as a surviving writer in the "Manchurian era" again in her later years.

Looking back on Haruko Ushijima's pioneering work when it became clear that "Manchukuo" was essentially a Japanese colonial experiment site after the collapse of "Manchukuo". We would like to clarify how she captured the pioneers. In this treatise, we focus on the novel "Undeveloped Land"(her only pioneering work), which is based on Korean pioneer group, and examine the story concretely in contrast to historical facts. We will examine the gap between "Undeveloped Land" and historical facts, focusing on the truthfulness of the main character, land lease and the conflict between Chinese and Korean farmers. Through this, we would like to investigate the tendency of the author to select history. In addition, we hope to find the limitations of the author's pioneering work and grasp the Author's colonialism.

牛島春子の「處女地」論

―在満朝鮮人の再構築と植民地主義の捉え方―

賈　戈輝

1. 本論文の目的と問題設定

今までの研究で「祝といふ男」、「張鳳山」という牛島春子が「満洲国」において「満洲人」を主人公にして作った小説に足を据え、文学世界と現実における祝の運命の違い、日本人であった「私」がどのように張鳳山を「人間」までに成長させたかについての検討によって、彼女の植民地主義の露呈、「満洲国」における浪漫精神を垣間見ることができた。今回では、牛島春子が「満洲国」での「開拓文学」とのかかわりを明らかにするうえで、彼女の開拓作品の特徴を浮き彫りにする。

現時点で、日本文壇において牛島春子は「満洲作家」として位置付けられている。川村湊は『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本』で「満洲文学」を三類型に分け、それぞれの項目を代表する文学者の名前を挙げた。牛島春子の名前は以下の文脈において挙げられている。

> 二番目は、満州に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々。(略)日本浪漫派の流れを汲むといわれる同人誌『満州浪漫』に集まった北村謙次郎、緑川貢、逸見猶吉、長谷川濬、長谷川四郎の兄弟、『祝といふ男』で芥川賞の候補となった牛島春子（略）[1]

この二番目の類型に分類される文学者達の中には、「プロレタリア文学運動、左翼運動への弾圧から逃れるために、満州までやって来たという、いわゆる“転向者”の逃れ落ちて行く場所ということで、満州に関わった人間も多い」[2]と川村は指摘している。川村湊の指摘のように、牛島春子は今でも主に「満洲作家」「転向者」のレッテルによって性質を把握されている。多田茂治は『満洲・重い鎖―牛島春子の昭和史』で牛島春子の「転向」についての経緯を、第二章「非合法活動・検挙」で、「福岡拘置所の独房で六か月を過ごすうちに、党最高幹部の佐野学、鍋山貞親らの転向声明書のプリントが配られ、紙と鉛筆を添えて、「転向理由書」を書けと命じられた」

と述べている。しかし、結局「「転向」を省いて、たゞ「理由書」という題をつけて、」「転向しないという「理由書」[3]を書いたという。このように「転向者」として認められた牛島春子は、「亡命」のつもりで、「満洲のほうがいくらか自由でしたから」[4]と思って夫牛嶋晴男といっしょに「満洲」にわたったと戦後のインタビューで告白した。

渡満前の経緯からわかるように、牛島春子本人は、「転向」をさせられながらも、「転向者」として自認しなかった。そして、戦後、牛島春子は、検挙された時の拘置所体験に基づいて「秋深む窓」を執筆した。「秋深む窓」の主人公和江は牛島春子本人をモデルにして作られた人物で、牛島春子は次のように、1949 年の時点から、転向を強いられた当時の自分を回憶した。

> 検事が警察署に出張してきた。最後の一問一答が始まったとき、和江はただ黙ってにやにや笑っているばかりで、何も答えなかった。業を煮やした検事は、最後に最も重要な問いを発した。「きみは今後もこの運動をやるつもりかね」「はい、やります」「うむ、銃殺されても？」「はい、銃殺されても」。[5]

このように、運動の決心を示した牛島春子が、執行猶予の身で、銃殺されても労働運動に参加するほど左翼としての強い信念を持ち「満洲」にわたったと考えられる。

ここまでの筋道を踏まえて、当時の「満洲国」がどのように牛島春子のようなプロレタリア運動に挫折した人々の目に映ったのかを重要視するべきだと思われる。本論文は「満洲」の開拓および「満洲時代」の「開拓文学」に注目する。というのも、日本は 1930 年代に昭和恐慌が起こり、国内での経済不況、人口過剰、環境破壊によって農民達が厳しい状況に追い込まれていたからである。そういった農業問題の解決は、日本政府に「満洲」への侵略を実現化させた一つの要因であった。その上、同時に農業問題は当時牛島春子のような左翼運動の文学者の関心事だったので、「満洲国」開拓という日本農民を救う有効な解決策として、彼らが関心を寄せたのは推測したやすい。

戦後、言わば「満洲国」崩壊後、「満洲国」が実質的に日本の植民地主義の実験場だったことが明らかになった時点において、牛島春子の開拓作品を振り返ってみると、彼女がどのように開拓民を捉えていたのかを明らかにしたい。本論文では彼女の唯一の開拓団（朝鮮開拓団）を題材にした小説「處女地」に焦点を当て、テクストの物語背景が歴史的事実のなかでどこに位置しているのかを確認した上で、牛島春子の「處女地」における開拓民の捉え方を分析し、彼女の執筆意図を究明しようと考える。

2. 日本にとっての「満洲国」の開拓

1930 年、昭和恐慌によって当時の日本の地方農村地域は疲弊と困窮を極めており、日本政府は、窮乏生活を送らざるをえない農業従事者の活路を、耕地の多い「満洲国」に見出した。1931 年「満洲事変」勃発を契機に、日本からの「満洲国」への移民が本格化し出した。1932 年、関東軍の東宮鉄男大尉と農業指導者加藤完治の発案による「第一次試験移民」として、20 歳から 35 歳までの在郷軍人 493 名が三江省の佳木斯に送られた。これが「満洲」最初の開拓村、「弥栄村」[6]となった。その後、二十数万人という日本人農民が「満洲国」の各地に移民として送られた。1936 年 6 月には、「新京」[7]で関東軍、「満洲国」、日本の拓務省、朝鮮総督府との合同の移民会議が開かれ、「20 年で 100 万戸、500 万人を移住させるという大移民計画」[8]が立てられた。これが、日本が史上最大の規模で計画した「満洲開拓移民」である。1937 年には、50 万人以上にのぼっている。[9]日中戦争前に「満洲移民」と言われたものは、1939 年より「満洲開拓政策基本要綱」[10]が成文化されていく過程において「満蒙開拓」と呼び方を変えた。「満蒙開拓」という呼称は 1945 年の日本の敗戦に至るまで使われていた。

最初の試験移民は「武装移民」として展開されてきた。一人ずつ小銃を持たされ、ソ連を仮装敵国とした国境警備の役割をも持たされていた。さらに、多くの移民達が入植したのは、畑や田んぼにならないような荒れた野原などではなく、すでに畑地となっている既墾地であった。つまり「満洲人」の農地を取り上げた土地に入植したのであった。満洲拓殖公社[11]は、日本人移民の土地を確保するために、「満洲人」農民が耕していた土地を安い金額で無理矢理に買収し、さらに家屋までも取り上げて、そこから彼らを追い出したのである。あるいは、今まで彼らが耕していた畑で、今度は日本人の地主から土地を借りる小作農か、農業労働者として住み込みで働くということになってしまったのである。[12]日本人に朝鮮半島の土地を奪われて、「満洲国」に流出した朝鮮人の農業労働者が日本人に雇われて働いている例も多かった。

3.「處女地」における簡略化される在満朝鮮人

「處女地」は、牛島春子が 1939 年『満洲行政』第 6 巻第 4 号に発表した短編小説である。朝鮮人の開拓団を題材にしたこの小説は、牛島の唯一の開拓作品とも言える。主人公朝鮮人玉明善 (以下は玉と略称する) は「満洲」にわたった後、同族の李善柱と知り合い、いっしょに土地経営をしていた。李善柱は豊富な資産を持った地主で、彼は金を出して土地を買い、玉は委託経営し、事変のために「満洲」に零

落した鮮人達を集め、李地主の土地を耕した。四年後、玉は、李地主と別れ、仲買人を立て、満人の地主から土地を買い、同族の農民達を集めていっしょに土地開拓の生活をしている。

小説は、玉を視点人物にし、「満洲」での朝鮮人農民の生活を、主に玉の土地買収と、玉をはじめとした朝鮮人農民の水溝開設の描写によって語っている。視点人物玉の「満洲」での身の上も以下のように述べている。

> 彼は民國年間に朝鮮咸鏡道の郷里から或日風呂敷包み一つを背負つて、てくてくと歩いて滿洲に渡つて来た。そして吉林省の奥に入つて小作をはじめ五年後の二十七の時には郷里から父と妻子を呼びよせて暮せるやうになつた。小金もたまりどうにか落つけるやうになつたと思つたのに、どう云ふ間違ひからか其の頃の中國公安局警察隊と云ふのに共産分子の疑ひをかけられて捕はれてしまつた。それから玉明善はハルピンだとか奉天だとかの監獄に一年近くたらひまはしにされてゐる中、彼にとつては全く救ひの神の滿洲事変が起つた。彼は日本領事館に救ひ出され家族と再會して、命からがら敗残兵の出没する吉林の奥から横道河子に逃げのび、それからハルピンに避難したのであつた。軍附の通訳に採用されたのはそれからであつた。彼の所属してゐる軍隊が、たまたまH県に駐屯した時、彼ははじめて李善柱と云ふ四十すぎの小柄な男と知り合ひになつた。（中略）そして二度目に合った時にはもう力を貸し合つてひと仕事する決心をしたのであつた。[13]

小説の時間線に遡ると、主人公玉明善は、渡満6年後に「満洲事変」が勃発した。即ち、玉明善（以下は玉と略称）は1925年前後渡満したことがわかる。つまり1925年の「或日」、彼は父親と妻子と別れ、郷里から歩いて「満洲」にわたる。1930年「共産分子」のうたがいにより一年間の監獄生活をさせられる。1931年「満洲事変」のおかげで、「日本領事館に救ひ出され」る。玉と李地主の出会いも1931年後のことだとわかる。よって、玉は李と別れ、土地を買う時点は1935年後だったのは推測できる。

しかしながら、玉の渡満の要因、中国日本両側に翻弄される運命についての解釈は欠落される。では、玉の身の上に残った不明点を明らかにするために、玉の渡満時点1920年代に絞って、この時期における朝鮮人の「満洲」移動に焦点を合わせ、玉の渡満経歴及び「満洲」での生存状況にアプローチしようと考える。

1920年代に在満朝鮮人がいかなる歴史的条件の下で渡満したのかを、まず朝鮮側の社会環境を見よう。1910年「日韓併合」以降、日本帝国主義による完全な朝

鮮植民地支配体制を確立した。[14]土地調査事業[15]（1910 年 3 月～ 1918 年 11 月）の遂行の結果、大量の農民が土地を失い、潜在的過剰人口として農村社会に広範に存在するようになった。また 1920 年から実施された産米増殖計画[16]の遂行により促進された 1920 年以降の朝鮮人農民の自作・小自作農の土地喪失は、朝鮮人移民の満洲国への転入を加速させた。その中には、咸鏡道・平安道出身者が多く存在した。1910 年代には朝鮮人の農民が「南満」[17]を中心として水田耕作を行っていた。彼らのほとんどが農業に従事していたため、家族単位の移住が最も普遍であった。しかし 1920 年代後半から、「南満」地域の耕作条件が次第に厳しくなっていったため、赤手空拳の朝鮮人移民は徐々に新開墾地ともいえる「北満」地域に移住するようになった。

以上のように、1910 年代の朝鮮人移民と比較し、1920 年代の朝鮮人満洲移動は、以下のような変化を持っていた。まず移動先は「南満」から「北満」に転換した。次家族単位の移住は個人単位の「満洲」進出することになった。この変化が造成されたのは、1920 年代の中国東北と日本側の政策転換と密接にかかわっていた。

1910 年代に、東北地域の農業開発において、日清戦争と日露戦争による大豆及びその製品の世界商品化と輸出増加が、東北地域の農業開発を刺激した。農業開発に従い、張作霖 (1875-1928) 政権と満鉄は移民誘致政策を行っていた。[18]一方、日韓併合、日本の武断統治による政治的原因が絡み合い、その上に、朝鮮南部における自然災害が多発した[19]ことによって多くの朝鮮人農民が多く「満洲」へ移住するようになった。しかし、1919 年朝鮮本土に起こった「三・一独立運動」[20]は「満洲」にも影響を及ぼした。これに対して日本官憲は、「不逞鮮人取締」[21]の強化に乗り出した。1921 年から、日本の満蒙既得権益を確保するため、日本側は従来の朝鮮人満洲移住に対する「放任政策」から、「無作為的奨励」への政策転換をなした。[22]こうした方針に従い、在満朝鮮人に対する「善導誘掖」政策を行った。しかし、中国側も 1919 年「五・四運動」を契機に、国権回復の要求や「対華二十一箇条要求」の反対、排日運動が全国に広がった。東北地方政府も、「満洲」にまで波及してきたナショナリズムを無視することはできなかったが、張政権は自己の勢力を強化するには日本と連携する必要があったため、その「排日」姿勢は屈折したものとならざるをえなかった。ただし、張政権は日本の積極的な満蒙進出に手を出し、朝鮮人を「日中外交問題の禍根」、「日本人の走狗」と見なし、「鮮農排撃運動」を行った。1927 年、日本側はさらに「対支政策綱領」[23]を策定した。日本側のこのような政策転換は中国に強い刺激に与え、中国人官憲による「鮮農排撃事件」は、頻繁に発生するようになった。つまり朝鮮人「排撃」は「排日」運動の一環として実行されていた。

日本側の中国大陸への露骨な進出と中国側の「排日」運動の中で、板挟みとなった在満朝鮮人の状況が極めて悲惨であった。20 年代後半において、朝鮮人農民は人口密度が希薄な中・北満地方まで進出するようになった。このような社会環境の下で、玉は 1925 年頃に、一人で東北地方の「中満」にあたる吉林省にわたった。即ち、玉の渡満を歴史的脈略に置いて考えると、彼の渡満は自己意志と希望に満ちた自主的なものとは考えられないであろう。しかし、「處女地」においては、玉の渡満経緯はごく簡単に個人的な事情として片付けられ、社会的な要因はいっさい言及されていない。

「小作をはじめ五年後」であった 1930 年に、家族団欒を期待していた玉は、「共産分子」のうたがいによって中国側に逮捕されていた。そして 1931 年に日本領事館に救い出された。中国日本両側に左右されていた玉の運命の背後に、朝鮮人農民が渡満した後、直面せざるをえなかった厳しい生存現実が潜んでいた。前にふれた日本側の「善導誘掖」と中国側の「鮮農排撃」を可能させたのは、朝鮮人の二重国籍というものである。「日韓併合」以降、朝鮮人には自動的に日本国籍が付与されたが、朝鮮人の日本国籍離脱が許容されなかった。そこで、朝鮮人の二重国籍問題は、日中両側に都合よく利用されていった。1910 年後、「日本帝国臣民」とされた朝鮮人の「満洲」での増加は、結果として日本の治外法権が介入してくる口実になった。同時に、日本国籍を持たされた在満朝鮮人の曖昧な法的・政治的位置が、東北の抗日武装を鎮圧するためにも巧妙に利用された。他方、在満朝鮮人への排斥は、中国側の排日運動の一環として持続的に行われた。[24]「満洲事変」直前において、日中の対立は一層激化しつつあり、「現地的犠牲の主要負担者」はもちろん在満朝鮮人である。玉に着せた「共産分子」の容疑はまさに日中双方とも在満朝鮮人を恣意に検挙するために、使われた口実の一つである。

歴史的事実に即して考えると、中国側に逮捕された玉は、実に中国排日運動の犠牲品だったと言えるであろう。「満洲事変」後日本領事館に代表された日本側の「鮮農の保護」とは、「日本帝国臣民」の朝鮮人農民を保護する名目で、「満洲」における権益を露骨に示したものにほかならない。しかし、「處女地」では、日中対立を欠落した上で、中国側による玉の逮捕の背後にある社会的環境を「どう云ふ間違ひからか」によって誤魔化している一方、「救ひの神の滿洲事変」によって日本の「大陸進出」を美化している。このように、牛島は歴史的事実を取捨選択した結果、日本側の侵略との関連性をテクストそのものから削除し、中国側の迫害だけを描出するという構図を浮かび上がらせた。

4.「處女地」における理想化される朝鮮人の開拓生活

以上から見られるように、「處女地」を歴史的事実に照らし合わせて見ると、玉の身の上に映し出された構図は、相当簡略化されたものだと言うまでもない。簡略化された構図によって、朝鮮人が渡満前に直面する過酷な現実、満洲事変前後悲惨な在満生存状況が欠落されてきた。それだけでなく、「處女地」における玉による構築された「満洲」での朝鮮人共同体は、戦争や植民地支配と無縁な「桃源郷」なものように描き出されている。

4.1. 理想化される李地主と玉明善

前にも言及したが、「處女地」の時間線に従うと、玉は1931年後同族の李地主と知り合い、それから李地主の土地の委託経営をするようになった。四年間の委託経営を経て、玉は土地を買える人間に成長した。[25]玉の成長の検討に立ち入る前に、李地主の存在に注目を当てる必要があると考えられる。1931年に既に地主であった李善柱の渡満時点は、1931年前、つまり「満洲事変」前だったと推測しやすい。「満洲事変」前の朝鮮人の渡満は1910年を境目に概観したら、以下の特徴が見られる。1910年までは、朝鮮人は中国・朝鮮・日本政府当局の国策的な移民計画によるものではなく、自由意志で入満した。この時期移動する朝鮮人は貧農、小作農が中心であった。1910年以降は、朝鮮人の渡満は日本の植民地政策と深くかかわっていくようになった。移動する朝鮮人は主に植民地政策によって土地喪失した自作・小自作農のことであった。[26]概して言えば、在満朝鮮人のほとんどは朝鮮内での生活基盤を失い、十分な資金を持たずに渡満したものである。

以上の歴史的事実を踏まえ、李善柱は渡満する前に既に十分な資産を持っていた確率は非常に低いであることがわかる。そこで李地主の成長は、「満洲」に到着した後のことだと考えられる。しかしながら、朝鮮人の李地主の存在は、当時の「満洲」において極めてめずらしいものであった。なぜかというと、渡満した朝鮮人は、「満洲」での生存状況も厳しかったからである。1931年朝鮮総督官房外事課によって編集される『対満朝鮮人移民に就て』に、1910年代から1920年代朝鮮人移民不振の原因について、以下のように記述される。

> 日本人に対する土地に関する権利は大正四年五月二十五日の日支條約にで南満洲に於ける土地の商租権認めらるゝに至り之れに依り三十箇年の長期租借をなし且無條件にて更新し得る租地権を得たるに該條約締結後に細則の締結なきに乗じて支那側は日本人に対し土地を商租せしむる者に種々の圧迫を加へ或は

税則を制定して過重なる商租税を課す等事実上商租を不可能ならしめたり、北満に於ては右の條約 (日支條約のことを指す。筆者注) なきに乗じ更に排日行為を露骨に行ひ農業者を苦しめたり、只帰化鮮人に対しては土地の所有権を認むるも資力少なき関係上実際に於ては土地所有者は極めて少数の者に限られたり。[27]

朝鮮移民の不振の原因を、排日行為の中に求めるのは、前述したように、朝鮮人の二重国籍のためである。日韓併合後、日本の法律に依り日本の国籍を持つ在満朝鮮人は、日中間の紛争の先鋭化を促進し、彼ら自身も厄災と惨禍とを蒙る。日本側は二重国籍を利用して彼らの土地所有権を持つように図り、次第に「満洲」の国土を獲得しようとした一方、中国側は排日行為の一つとして、彼らに官憲や地主の搾取を行い、日本の侵略を注意ぶかく反抗していた。日中の狭間に置かれて喘いだ在満朝鮮人は、地主迄で成長できるのは極めてめずらしい存在だと言える。この苦境において、李善柱の存在は、大部分の在満朝鮮人の生活を代表できるものではない。しかし、「處女地」における李地主の存在は直ちに玉をはじめとする朝鮮人共同体の形成にかかわって、それに見逃さない役割をはたしている。

玉は李地主の土地を委託経営していた四年間に、土地を買える財産を持つようになった。玉と李地主は力を貸し合ってひと仕事を以下のようにしていた。

李善柱は豊富な資産をもち、玉明善はよく働く頭とそれを正確に実践して行く手足とをもつてゐた。そこで李は金を出して土地を買ひ、玉はその土地を農場として委託経営することになつた。玉明善は直ちにその時も今度のやうに土地を物色し、事変のために耕す土地や仕事を失つた方々に散ばり流れあるく鮮人達を集めて。いよいよ彼の建てた方針のもとに最初の鍬を李地主の土地に打ち込んだのであつた。[28]

玉は委託経営していた土地で、同族の人々を集めて耕させていた。その報酬として穀高等をもらうことができた。このように次第に土地を買える財産を持つようになった。つまり、玉の財産の根源は、李地主の土地にあったのである。しかしながら、前に分析してきたとおり、李地主の存在は、当時の背景に置いて見ると、確率が非常に低いものであった。よって、玉の「満洲」での成長も極めて珍しいものであった。実は、「満洲事変」以降の在満朝鮮人の約八割のものが農業に従事していた。このため、彼らは、主に商租権と小作権の形で土地開発をしていた。[29] 1932 年「満洲国」成立以降、彼らの土地商租権は守られるようになったが、やはり彼らの経済状況の

ため、農耕地を商租、購入できるのは極めて僅かであった。言いかえれば、商租権の法制化は在満朝鮮人農家を土地所有者に引き上げることができず、彼らの大部分は相変わらず小作農である。[30]事変後、在満朝鮮人の救済措置として一時的な小作条件の改善策が実施されていったが、中国地主側の猛烈な反対によって、実質的な改善はできなかった。かえって朝鮮人小作人と中国人地主の対立を激化させていた。しかし、玉、及び玉をはじめとする朝鮮人農民達の開墾生活には、日中民族間の対立がないのみならず、朝鮮人農民と中国人地主との対立も不在である。つまり、「處女地」において、日本人も中国人も登場しない、在満朝鮮人のみの共同体が作られている。

概して見ると、玉が李に出会う以前の境遇は、歴史的事実に辿って遡ると、切実な真実性を持ち、言いかえると当時大部分の在満鮮人の縮図だったと言える一方、李に出会った後の玉は、大部分の鮮人と違う道を歩むことができ、さらに玉のおかげで、多くの鮮人農民も同族の人の土地で生活を営むことができた。即ち、一般的に鮮人にとってしいられる苦境は、李と玉の存在によって解消されていった。しかし、当時の「満洲」において、李、玉の存在の確率より、このような鮮人達の共同体の真実性は一層低いものだと言わざるをえない。

4.2. 隠蔽される植民地支配の力

そしてこの理想の異様さは、玉が自分の土地を買った以降、より露骨に表現している。玉は李地主から一部分の土地をもらい、気心の知れた同族達を集め、新しい開墾生活をはじめた。開墾の前に、農民達を収容する家屋が必要であるため、玉は先ず一人で家屋をさがしに出かけた。

> S鎮からまつすぐに通じた道が小橋を渡り、町をはづれてだらだらと荒地に向ふ丘陵の斜面をおりようとするあたりに、広い庭を前にしてコの字型につゞいた二十軒ばかりの家屋がそつくり空いてゐた。おそらく事変直後匪賊共に荒されて以来住む人もなくなつたのであろう。買ひあげた土地までにちょつと離れてゐたが、丁度その土地を一目で見わたせる高みにあつたので、玉明善はそこを一間房子年十五圓で借りることにきめた。[31]

玉は「そつくり空いてゐた」「二十軒ばかりの家屋」を借りた。同族農民の安置をこのようで解決できた。農民たちも高揚した気分で移住した。彼らは「四頭立や五頭立の大車」に、「世帯道具から農具まで」積み込んでいた。「女や子供達は髪を撫でつけ、洗濯した白いちまに着更へて」「物見遊山にでも行く時のやうに彼女達

は何となくうきうきしてゐてひそひそ話し合つてばつゝましやかな笑ひ声を発するのだつた」。男たちも「はり切つてゐた」。彼らの興奮ぶりを、「ゆくてに、新らしい土地が自分等のうち込む鋤鍬をまつてゐると思ふと、むづむづと心の深い所から泉のやうに湧きあがつて来るよろこびがあつた」[32]というふうに説明されている。このように描かれる朝鮮農民の開拓が、自己意志と希望に満ちたものではあるが、しかし歴史に記録された朝鮮開拓団は、「物見遊山」の気持ちの代わりに、途方に暮れるうらぶれた気持ちで開拓生活を過ごしてきた。

前述したように、玉が土地を買う時点は1935年後であるため、歴史上1935年以降の在満朝鮮人の開拓生活に照らし合わせ検討する必要がある。1930年代後半、1936年に国策移民実施会社「満鮮拓殖株式会社」(以下は「満拓」と略称)[33]の設立を契機に、在満朝鮮人への統制管理が本格化されていった。しかし、「満拓」は、「治安粛正」の目的を優先させ、「満洲」での抗日武装を鎮圧するため、抗日聯軍の活動が活発な荒れ地に移住させた。そのため、彼らが戦乱の脅威に生活を脅かされながらも、つらい開拓生活をしいられていた。現実の状況は、1930年代後半の移民の証言によると、以下のようである。

> 着いてまもなく、まだ住む家もろくに建てられていない有り様なのに、集落を囲う土塁を作れと言われる。警察が割り込んできて、まず住む家がほしいと抗弁すると殴られた。それで、このあたりが日本の支配に抵抗する東北抗日聯軍が活発に活動する地域だと知る。(中略)「満洲」に行けばちゃんと飯が食えると思ってやって来たのに、その日本のせいでここでは命そのものが危ない。(中略)
> 凍った地面の上に建てた「仮小屋」と呼んだむしろのテントで酷寒に苦しみながら暮らさなければならなかった。日本軍と警察は東北抗日聯軍の襲撃を防ぐために昼夜問わず警備に立った。[34]

以上のような朝鮮農民の共同体は、植民地支配と抵抗の暴力的な力に巻き込まれた状況で、開拓生活を、住む家の建築から始めた。この証言と比較したら、「處女地」における玉等の朝鮮農民によって築いた共同体は、歴史の中で「例外的空間」として捉えられる。それに、この「例外性」を可能させたのは、ただ玉の個人の能力に帰結できる。岩がごろごろ転がるひどい荒地に土塁を作るの代わりに、玉は彼自身の財産で「そつくり空いてゐた」「二十軒ばかりの家屋」を買った。もとの生活基盤が破壊されて止むをえず命がけで渡満した朝鮮農民は、戦渦の中に投げ入れられ、死亡を思わせるつらい気持ちで開拓生活をし始めるのかわりに、「處女地」の彼らは、

玉のおかげで、飢えも争いもない、車をつかって、洗濯した服に身を包み、希望と平和の雰囲気に笑い声を発しながら開拓生活を営み始めることができた。このように、玉を借りて、「満洲」の大地で朝鮮農民の夢見る「桃源郷」の実現の可能性が示される。つまり、彼らの集団的な夢が、存在確率の低い一個人の一力に依託されている。

個人の力が巨大化されると並行するのは、歴史的現実が矮小化されつつあることである。玉を中心として描かれる開拓生活から、現実の匂いを嗅ぐことができない。これで順調に開拓生活をはじめる玉たちの朝鮮農民共同体は、戦争の紛争と植民地支配の力に妨害されることなく、「満洲」の厳しい自然条件の中で、水溝を開設する。「處女地」の大部分の内容は、自然条件による開拓のむずかしさを描写するために費やされている。他方、歴史上の記録で頻ぱんに発生する現地の中国農民との紛争は、極めて曖昧に処理されている。

> 玉明善一行はこの僻村に入植して来た最初の集團的な異民族にはちがひなく、一般の滿人から何となく警戒され胡散くさがられるのはもつともなことであつたが、こん度のやうな風に警察が職權をうごかして乗り出して來るやうなことになると、とても安心して農場經營も出来なかつた。先き先き異民族故にいろんな不當な掣肘や障害を加へられるだらうことが目にみえてゐた。それで玉明善は署長に會つて話す一方、わざわざ縣公署まで出かけて行つて參事官に陳情して來たのだつた。[35]

玉たちは荒地の水田開墾に準備しているところに、二十軒房子を貸してくれた家主は鮮人に警察の許可なくして家を貸したので、留置されていた。玉は参事官に陳情してやっと家主を釈放することができた。そして、「先々もま俺等が警察の横槍で困難な目に合ふことのねえやうによく面倒をみる」[36]という参事官側の保護をもらい、玉たちは安心して開拓をつづけることができた。

彼らは現地中国農民に「警戒され胡散くさがられる」、又将来「不當な掣肘や障害を加へられるだらう」と心配する。さらに、中国農民側の警戒が、彼らの異民族のことに起因すると説明される。ここでの「不當な掣肘や障害」が、一体どうして発生したのであるか。朝鮮人農民たちは「警察の横槍」のおかげで、安心して農場経営出来るという構図に隠される日本側の暴力はどのように作用していたのかということを、歴史的事実と対照させつつ把握しようと考える。

鮮人に家屋を貸すことは、日本側と中国側との対立の中で、かなり微妙なものである。前述したとおり、日韓併合以降、朝鮮人の二重国籍問題は、日本の中国土地

買収のために悪用されていった。中国側は、排日行為の一つとして、朝鮮人の土地買収及び租借が禁止されるに至った。1932 年「満洲国」が建国した後、旧東北政権時代の排日的・反日的な諸法令が一切廃棄された結果、在満朝鮮人の「満洲」での土地購入、土地商租権が完全に守るようになった。[37]しかし、彼らの土地買収や租借なども相変わらず中国側に反抗されていた。よって、中国側が貸主を逮捕したことの可能性は高い。そして日本側の介入によって、貸主が釈放されることができた。

また、根本的に彼らと現地農民との敵立を激化させたのは、水稲耕作による水利・土地問題である。1930 年代、中国の米の過度の依存は、「満洲国」の国防上、産業開発上において極めて不利だと判断した関東軍は、「満洲」での水稲栽培を積極的に推進していた。産米増殖において、稲作を得意とする在満朝鮮農民が担い手となった。そこで、畑作を中心とする中国農民との耕地占有の競争は激しくなった。それに、水稲作による畑作の被害への憂慮と不安も中国農民の嫌悪と増悪を招いた。この頃の中国人対朝鮮人の民族紛争は殆ど稲作と畑作をめぐる対立によるものであった。

以上の問題を踏まえて玉たちが遭遇した、現地農民の警戒を単に他民族のことに帰結しかねる。現地農民との敵立が軽く表現されるうえで、玉たちの立場から物事を見る眼差しをもって、日中民族の紛争も隠蔽される。と同時に、日本政府の植民地支配の暴力は、玉たちへの保護によって正当化される。しかしながら、玉たちの開拓生活には、日中民族紛争との関連性が削除されているが、他方中鮮民族紛争が意図的に描写されている。歴史的見ると、中国と日本との間の屈折した緊張関係の中で展開されたものとして捉えられる中鮮民族紛争は、玉たちの開拓生活において、日本の植民地支配とかかわらない形で現れている。その上で、日鮮民族紛争を収めるために、日本側の介入を登場させた。言いかえると、日中民族対立の欠落のうえで、中鮮民族紛争を把握という牛島春子の執筆姿勢はここで浮上している。さらに、「處女地」における日中鮮の構図と歴史的事実における日中鮮の構図とのズレから考えると、作者の日本植民地支配についての認識も見られる。

5. おわり

本論は牛島春子の唯一の開拓作品「處女地」に焦点を当て、歴史的事実と対照しつつ物語を分析した。「處女地」と歴史的事実とのズレを、主人公の真実性、土地租借と中鮮農民対立に重点を置きながら、具体的に検証した。作者が歴史を取捨選択した結果、真実性の低い主人公、矮小化される民族対立と歪んだ日中鮮の構図に

もとづいて朝鮮農民たちの桃源郷は構築された。そこから、日本農民への救済策として捉えられてきた「満洲」開拓に、牛島春子が朝鮮農民の活路を模索している執筆意欲は垣間見えた。しかし、牛島は在満朝鮮農民を再構築しながら、結局日本植民地支配の力を暗に示している。そして開拓生活への作者本人の展望は、実際に植民地主義の中で展開されていったことも明白になった。よって、そうした限界性のため、「處女地」を国策小説として把握できる根拠が生み出される。と同時に、日本側は中国側の迫害から朝鮮農民を保護する構図から、作者の植民地主義についての認識、つまり、日本植民地支配の正当性についての理解も具体的に検討することができた。

注

1　川村湊著『異郷の昭和文学―「満州」と日本近代』岩波新書、1990 年、23-25 頁。

2　同上、25 頁。

3　多田茂治著『満洲・思い鎖―牛島春子の昭和史』弦書房、2009 年、71-72 頁。

4　川村湊著「「満洲文学」から「戦後文学」へ牛島春子氏インタビュー」『「戦後」という制度』インパクト出版会、2002 年、114 頁。

川村　当時、満洲には日本で共産主義運動をしていて、満洲へ渡った人がたくさんいましたね。山田清三郎さんもそうですし、野川隆という人もいました。牛島さんもプロレタリア運動していて、捕まって、満洲へ渡ったわけですが、逃げたというか、亡命したというような意識はおありだったのですか。

牛島　それはありましたね。満洲のほうがいくらか自由でしたから。

川村　牛嶋晴男さんと結婚してから渡ったんですね。

牛島　私の姉婿が軍人で新京にいましてね。苦力なんかを使っていたんです。そこに晴男さんんが頼って行ったんです、私のツテで。

5　牛島春子「秋深む窓」『女人芸術』第一集、1949 年、23 頁。

6　「弥栄」とは、漢語の「万歳」に対して、大和言葉としてそれに代わりうる言葉として造語されたものだった。もと中国の永豊鎮と呼ばれていた土地であった。

7　新京 :「満洲国」の首都、今の中国長春市を指す。

8　この計画とは、1937 年から 1956 年の 20 年間に、100 万戸・500 万人の日本人移民を満州に送出するというものであった。内訳は、第一期（1937-1941 年）10 万戸、第二期（1942 年 -1946 年）20 万戸、第三期（1947 年 -1951 年）30 万戸、第四期（1952 年 -1956 年）40 万戸としていた。100 万戸・500 万人とするのは、農業移民一戸あたりの家族数を 5 人として計算したからである。当時日本の総農家数は 560 万戸であり、そのうち飢餓農民の

典型であるとみなされた5反（5アール）以下の耕地しか所有していない小作貧農は、200万戸であった。百万戸移住計画は、この5反以下の農地しか持たない飢餓農民の半数を20年間で、「満洲」に移住させる意図であった。

9　川村湊著『満洲国―砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』現代書館、2011年、82-83頁。

10　満洲開拓政策基本要綱：名目は1939年12月に日本国政府と「満洲国」両政府とが共同して発表した、満洲移民政策に関する基本要綱である。実はそれは大量移民が国策化されたことを受けて強引に進められた用地確保が、日中戦争の開始とその長期化という新しい状況において困難に直面し、それに対する新たな政策的対応として打ち出されてきたものであった。

11　満洲拓殖公社：1935年に「満洲国」、「南満洲」鉄道、三井合名会社、三菱合資会社の出資で設立された満洲拓殖株式会社を前身として1937年8月に設立された。「満洲国」の開拓、開拓団の支援などを行った。日本の国策特別会社であった。

12　川村湊著『満洲国―砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』現代書館、2011年、82-88頁。

13　牛島春子「處女地」川村湊編『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001年、49頁。

14　金永哲著『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012年、15頁。

15　土地調査事業を通じて広大な国有地が創出され、それはのちに東洋拓殖株式会社をはじめとする日本人地主に払い下げられた。

16　産米増殖計画は、第一に、米の生産額を増やしたが、それ以上に日本への米の輸出が激増したため、朝朝鮮人農民民の深刻な食料不足を引き起こした。第二に、水利組合事業として行われた土地改良事業に対して融資された資金を償還するために、朝朝鮮人農民民の組合費の過重化をもたらし、自作、自小作農の土地喪失を促進させた。朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶の水書房、2015年、33-34頁。

17　「北満」「南満」は、日本とロシアが1907年に中国の東北において勢力範囲を分割する際に形成された用語で、長春及び舒蘭、額穆、間島などを含めた地域を「南満」、その北は「北満」とした。

18　朴敬玉著『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶の水書房、2015年、23-27頁。

19　1916年、17年の二年に亘る朝鮮南部地方の未曽有の凶作の結果、同地方の朝鮮人満洲移住に拍車をかけたといわれる。民政部総務司調査課編『在満朝鮮人事情』民政部総務司調査課、1933年、4頁。

20　1919年3月1日に朝鮮全土で起こる日本軍の武力に反抗する独立運動である。朝鮮内でこれが鎮圧されるや、抗日武装闘争が「満洲」、上海、ロシア沿海州でつづられた。

21　「不逞鮮人」とは、独立運動を行う朝鮮人に対し「陰謀」「反逆」と結びつけられてつくられ、次第に一般の朝鮮人にも使われはじめた民族蔑視的な言説である。金富子「植民地帝国日本と朝鮮人の移動」金富子等編・李光平写真『「満洲」に渡った朝鮮人たち　写

真でたどる記憶と痕跡』世織書房、2019 年、156 頁。

22　金永哲著『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年、21 頁。

23　「対支政策綱領」は満蒙地域における日本の「特殊権益」を守るだけでなく、同地域の治安維持にあたり中国本土より切り離しておく「満蒙分離政策」を強調した。金永哲著、前掲書、22 頁。

24　安志那著『帝国の文学とイデオロギー　満洲移民の国策文学』世織書房、2016 年、224-225 頁。

25　牛島春子「處女地」川村湊編『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001 年、50-51 頁。

26　金永哲著『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年、13-23 頁。

27　朝鮮総督官房外事課『対満朝鮮人移民に就て』調査資料第壹、1931 年、10 頁。

28　牛島春子「處女地」川村湊編『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001 年、50 頁。

29　金永哲著『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年、104 頁。

30　前掲書、108 頁。

31　牛島春子「處女地」川村湊編『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001 年、52 頁。

32　前掲書、53 頁。

33　「満鮮拓殖株式会社」とは、関東軍の統制の下で「新京」（現長春）に創設され、朝鮮人の移民先や生活を左右した国策社会である。

34　金富子等編李光平写真・文『「満洲」に渡った朝鮮人たち―写真でたどる記憶と痕跡』世織書房、2019 年、48-53 頁。

35　牛島春子「處女地」川村湊編『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001 年、60 頁。

36　前掲書、59 頁。

37　金永哲著『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年、104 頁。

参考文献

安志那『帝国の文学とイデオロギー　満洲移民の国策文学』世織書房、2016 年。

飯田祐子『彼女たちの文学』名古屋大学出版会、2016 年。

牛島春子「秋深む窓」『女人芸術』第一集、1949 年。

川村湊『異郷の昭和文学―「満州」と日本近代』岩波新書、1990 年。

――『文学から見る「満州」』吉川弘文館、1998 年。

――『牛島春子作品集』ゆまに書房、2001 年。

――「「満洲文学」から「戦後文学」へ牛島春子氏インタビュー」」『「戦後」という制度』、インパクト出版会、2002 年。

――『満洲国―砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』現代書館、2011 年。

金富子など編・李光平写真『「満洲」に渡った朝鮮人たち　写真でたどる記憶と痕跡』世織書房、2019 年。
金永哲『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年。
坂本正博「拝泉へのまなざし上」『叙説 2』第 1 号（2001 年 1 月）、149-166 頁。
――「拝泉へのまなざし下」『叙説 2』第 2 号（2001 年 8 月）、213-230 頁。
佐賀郁朗『受難の昭和農民文学―伊藤永之介と丸山義二、和田伝』日本経済評論社、2003 年。
新・フェミニズム批評の会編『昭和前期女性文学論』翰林書房、2016 年。
多田茂治『満洲・思い鎖―牛島春子の昭和史』弦書房、2009 年。
朝鮮総督官房外事課『対満朝鮮人移民に就て』調査資料第壹、1931 年。
朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶の水書房、2015 年。